

青年を対象としたフィンガーペインティングと 切り絵にみる表現生成過程の分析

安 立 奈 歩*

Analysis on Expression Process in Finger Painting and Cutting for Adolescents

Naho ADACHI

I. 問題と目的

内界を表現する営みが心理臨床的な観点から重要な意味をもつことは従来から指摘されている。芸術療法は、箱庭や描画など主に非言語的手法によってクライアントの内的世界の表現してもらおう試みであり、表現すること自体が治療的意味を持つ。

一方、上述の前提と相反する現象として高石（2001）は、大学の学生相談室で「描画や箱庭を勧めても、なかなか応じてくれなくなった。苦手意識が強いとか、評価を恐れるというだけでなく、イメージが沸かないらしい」と報告し、近年のデジタルな情報技術の進歩により意識と無意識の中間的な領域の豊かさが相対的に失われつつあることを指摘する。大山（2007）もまた、20代の専門学校生を対象としたファンタジーグループにおいて10年間で変化が見られると述べ、「非日常というけど、自分がふだんから知っているメンバーとこのようなことをやっても、日常と変わらない」という感想が増え、外部観察者と内観の大きなずれがあること、フィンガーペインティングを再構成する切り絵で〈全部使うこと〉と教示しても作品に含めにくい部分をごみにして捨てる行動が目立ち、自己に向かい合うことが難しくなっていること、の2点を指摘する。

高石（2001）、大山（2007）の指摘は青年期後期にあたる学生に対するものであり、その点を踏まえ、本研究でも20代の大学生を対象とする。ただし、本研究では、教育や支援の対象としてこれまで多く研究対象とされることが多かった実態を踏まえて20代の小集団を対象とするものであり、青年期の心的様相が変化してきているのかについては検討を急がない。さらには、経年的変化についても今回は検討できないため、今後につなげる端緒として本研究を位置づけることにする。

フィンガーペインティングと切り絵は、日本では樋口・岡田（2000）によって発展した、集団で行なう心理療法であるファンタジーグループのプログラムの一部で、「イメージの世界に遊ぶこと」、「抑圧されたものをすこしでも解放し、無意識にあるものとすこしでも

* 人間関係学部 心理学科

関係をもとうとする試み（樋口・岡田，2000）」を目的とする。いずれも無言で行なった後にディスカッションを行なう点，フィンガーペインティングでは領域争いといったグループ力動が生じるとされている点，切り絵ではより意識に近いレベルの体験がなされるとされている点（樋口・岡田，2007）から，前言語的レベル・言語的レベル両方の体験の質，対人関係の質，体験の深さについて，推察する手がかりが得られると考えられる。本研究では，フィンガーペインティングと，それを再構成する切り絵において，他者とともにありながらどのように自分と向き合うのか，その体験をどのように表現するのか，というプロセスについて検討する。

また，本研究では，イメージの沸きにくさ（高石，2001），自己に向き合うことの難しさ（大山，2007），という視点を軸に据える。そこで，自己にどの程度向き合っているかの言語的レベルの自己報告として，アレキシサイミア尺度（Galex）（後藤・小玉・佐々木，1999）を併用し，質的な表現の特徴を見るための分類の手がかりとした。この尺度は，感情表現の困難・内省や想像力を広げることの困難といった心理的特徴で構成されるアレキシサイミア概念を手がかりとしているアレキシサイミア尺度の一つで，「自分の気持ちがいまどうなのかわからなくてとまどうことが多い」など8項目からなる「体感・感情の認識言語化不全因子」と，「自分の気持ちを見つめないほうだ」「想像力に欠けている，と他の人に言われる」など8項目からなる「空想・内省不全因子」の計16項目から構成され，各因子の内的整合性，再検査法による信頼性，併存的妥当性が確認されている。本研究では，この分類基準に基づいて，フィンガーペインティングと切り絵で表出された表現を質的に検討し，その特徴を掴むことを目的とする。

II. 尺度を用いた分類基準の設定および対象者の分類

1. 分類基準の設定

Galexは2因子モデルに要約可能とされており，因子間相関は -0.08 とほぼ独立した因子と見なされる。本研究では表現生成の観点から直交2軸によるFigure. 1のモデル化を試み，四つに分けられた座標面を，各因子の特徴を踏まえ，次のように命名した。Figure. 1の右上の座標面は，体感や感情の表現，空想や内省，ともに難しいと感じている群で“表現全般不得意群”とした。左上の座標面は，体感や感情の表現は難しくないにもかかわらず，空想や内省は難しいと感じていることから，イメージの世界で遊んだ上で表現がなされているかがはっきりしないため，“イメージと表現の不連続群”とした。右下の座標面は，体感や感情の表現が難しく，空想や内省は難しくないと感じていることから，感じた違和感を見つめるためにイメージの世界に留まろうとしていると予想されたため，“イメージ表現探求群”とした。左下の座標面は，体感や感情の表現，空想や内省，ともに難しいと感じていない群で，“表現全般得意群”とした。

そして，この4分類を基準に，対象者のフィンガーペインティングと切り絵における表現生成過程を検討した場合，それぞれに特徴が見られるのではないかと考えた。

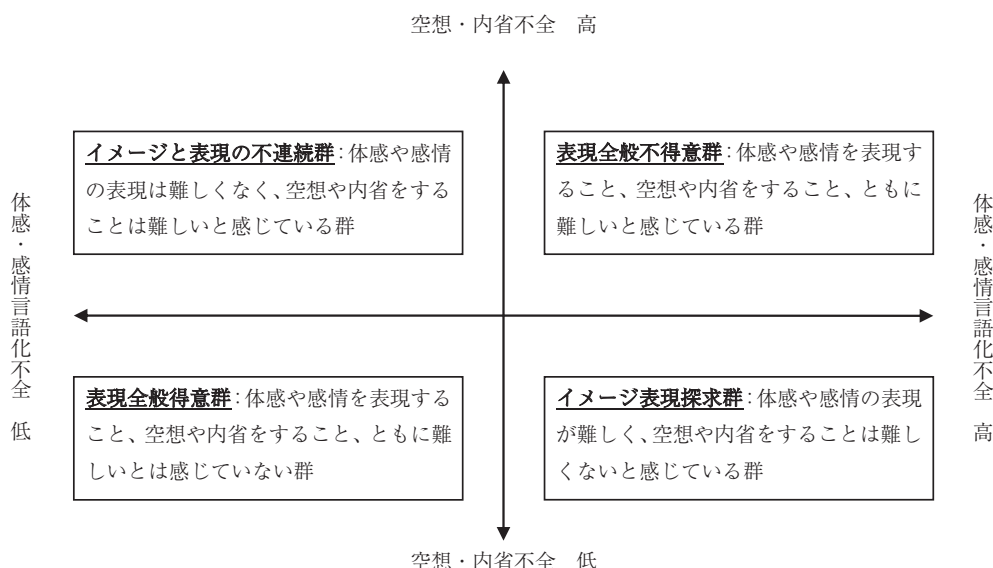


Figure. 1 アレキシサイミア質問紙 (Galex) をもとにした四分類モデル

2. 分類基準に基づいた対象者の分類

対象者 A大学に所属する女子大学生3-4年生18名。年齢は20～22歳（平均21.17, SD0.71）。

手続き 2009年後期の授業時間を用いた。9月第5週にGalex（後藤・小玉・佐々木, 1999）を実施し、翌週、研究目的を説明して研究発表の了承を得た。Galexの結果はTable. 1の通りであった。サンプルが少ないことと、後藤・小玉・佐々木（1999）のデータは男女込みであることや、今回の研究から10年以上前のデータであることから、データの性別・調査時期を統一するため、安立（2010）で用いたデータの平均値と標準偏差（第1, 第2因子順に33.49（9.13）, 23.62（6.16）, 女性79名, 平均年齢18.75歳）をもとに対象者の標準得点を算出し群分けした（Figure. 2）。

Table. 1 Galexの平均点（括弧内は標準偏差）

| | |
|-----------------|--------------|
| 体感・感情の認識言語化不全因子 | 30.28 (8.79) |
| 空想・内省不全因子 | 21.83 (4.26) |

18名の対象者のうち、先に提示したFigure. 1の4群の代表例となるよう標準得点の絶対値が大きい7名を後述の事例でとりあげた。その対象者A～Gを図中に示す。なお、グループの力動過程にも表現の特徴が表れるため、3グループのうち2グループをとりあげたため、標準得点の絶対値が大きくても考察でとりあげられない対象者が存在する。

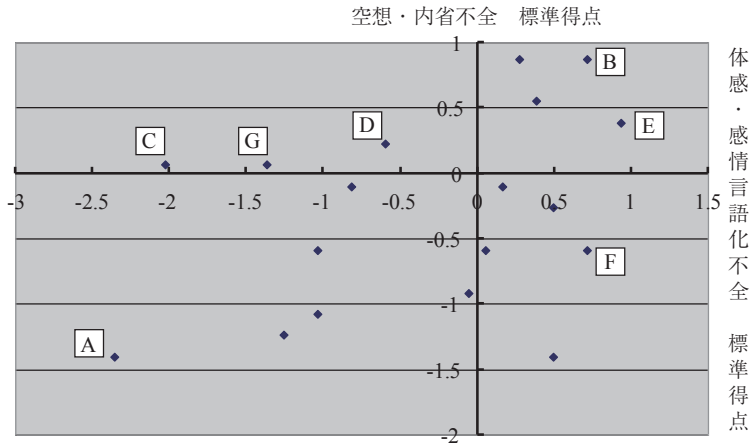


Figure. 2 Galexを用いた標準得点別にみる対象者の分類

Ⅲ. フィンガーペインティングと切り絵の実施

上述の18名の対象者が6名ずつ3グループに分けられた。各グループに心理臨床を専門とする大学院生が入って逐語録をとり、筆者が全体の見守り手となった。授業後、筆者と院生によるカンファレンスが行なわれた。フィンガーペインティングと切り絵は以下の手続きで授業時間内に実施された。なお切り絵は正規のやり方とやや異なり、雑誌からの切り貼りも加えている。

1. フィンガーペインティング

2009年11月第2週に実施した(90分)。言葉を発せず指で絵を描くことを伝え、「指で絵の具と水の感触を味わい、紙に塗りつけることでどんな心の動きがあるのかに目を向けてみましょう。一つの紙に無言でメンバー全員が向き合うので、自ずとそこに自分が人間関係においてどう振る舞うかというテーマが生じてきます。自分の動きや周りの動きにも着目してみましょう」と教示した。制作後、正位置を決めてタイトルをつけるよう教示し、ディスカッションの時間を設けた。

2. 切り絵

2009年11月第3週に実施した(90分)。フィンガーペインティング作品を味わった後、切り絵に入った。言葉を発せず行なうこと、フィンガーペインティング作品と雑誌を使って模造紙に貼ること、フィンガーペインティング作品は残さず使うことを伝え、「制作のプロセスでどんな心の動きがうまれるかに注目してみましょう。グループ内で感じ取った関係、そこでの自分の振る舞い方、日常生活での自分のあり方、等に意味づけしてみましょう」と教示した。制作後、正位置を決めてタイトルをつけるよう教示し、ディスカッションの時間を設けた。

3. 振り返り用紙の記入

2009年11月第4週に実施した。何を作ったか、表現したいテーマが見られたか、制作中どんなことを感じたか、について振り返り用紙への記述を求めた。

IV. 分類基準に基づいて抽出された事例に関する質的分析

表現を「実感された形になりにくいものを形にする試み（大谷・安立・河野，2006）」と捉え、検討材料として、①作品そのものに加えて、②グループ力動の観察、③制作後のグループディスカッションにおける語り、④振り返り用紙に記入された自己報告、とした。そして、Figure. 1の群別に、筆者と院生で事例検討を行なった。

以下に、事例A～G（Table. 2）について、グループごとに考察する。選出した事例は、“表現全般不得意群”1名、“イメージと表現の不連続群”3名、“イメージ表現探究群”1名、“表現全般得意群”1名であった。

Table. 2 事例で挙げられる対象者の該当する群

| 対象者 | 該当する群 |
|-----|--------------|
| A | 表現全般得意群 |
| B | 表現全般不得意群 |
| C | イメージと表現の不連続群 |
| D | イメージと表現の不連続群 |
| E | 表現全般不得意群 |
| F | イメージ表現探求群 |
| G | イメージと表現の不連続群 |

1-1. グループ1のフィンガーペインティング：A・B・Cの事例

Figure. 3は、グループ1のフィンガーペインティングである。

グループ1は全体的に口数が少なく、口火を切る役割を主にA（“表現全般得意群”）が引き受けていた。Aは最初に模造紙に手をつけ、最初に天使を描いた。後の語りで「人間を描きたかった。人間描いたらみんな描いてくれるかな」と、描きたい思いと周りへの配慮を両方示し、メンバー内で唯一コンスタントに手が動いていたのが印象的であった。後述のBが雨を描いたらジョウロを加えるといった計らいや、後述のCを筆頭に押された手形を鳥に変えるという、他者の表現との相互性を楽しむ様子が見られた。

B（“表現全般不得意群”）は模造紙に手をつけるのが遅く、花や星等、具体的な物を描き、Cの描いた雲から雨を降らせた。領域としては非常に小さい。後の語りで「何描いていいかわかんない」と言い、「(下部中央の)木をみて花を描いた」「周りを見て合わせるのが楽」と、周りの表現に付け足す形で表現する傾向が窺われた。終盤はCに同調して手形を押し、「侵入できたから好き放題できた」と語り、後の語りでも表現への不全感は特に語られず、周りの勢いに乗ることも含めて表現になっていたと思われる。

C（“イメージと表現の不連続群”）は赤い線を引っ張ったが、後の語りで「無意味に線ひいた。よくわかんなくなって…ねこのしっぽ」と、イメージが形になりにくい様子であった。笑いながら雲と太陽を描き、別のグループの様子を窺った後、手形をつけ、一通り終

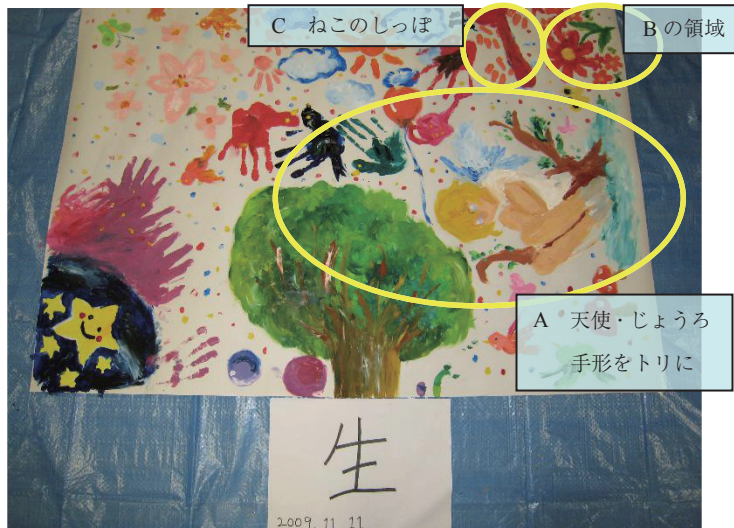


Figure. 3 フィンガーペインティング (グループ1)

えると手持ち無沙汰な様子になり、グループ全体の動きが鈍くなったところで中央部に手形をつけ、別のグループを見ながら、勢いよく模造紙全体の隙間を埋めるようにドットを加えていった。後の語りで、「やっちゃえ、侵入しちゃえ！って」と述べ、勢いで働きかけようとする姿が印象的であった。

1-2. グループ1の切り絵：A・B・Cの事例

Figure. 4はグループ1の切り絵である。この回Cは欠席であった。まず数名で協力して樹が貼られ、樹を中心に鳥や花が貼られた。貼られたパーツの多くはフィンガーペインティングと同じ物が多い中、Aはバラバラになった紙を貼り合わせて花を作り、赤地の紙を丸く切り抜いてりんごに仕立てる等、他者の作品を新しい物へ作り変えることを試みた。後の語りで、「形のないものは形を自分で作ろうと」と語り、作品上にイメージを乗せている様子であった。

Bにはあまり動きが見られなかった。雑誌を見るが、貼りたいものが見つからない様子で、ページをペラペラめくって時間が過ぎる感じだった。後に「雑誌をみたけど服や人が多くて（切り絵は自然のものが多いし）イメージが合わなくて」と、人間がテーマの作品を加えることにためらう様子であった。また、「切って放置した物もあった。Aさんに貼ってもらった」と語り、手を動かすものの表現したいものが見つからない様子も見られた。

欠席だったCが描いたドットは、作品を残さず使うよう教示しているにもかかわらず、多くが使われずに捨てられた。後の語りでは、「単品で描いてまとまっていたから」といった意見が出されたものの、フィンガーペインティング制作時のCの働きかけに対するメンバーの抵抗であるようにも思われた。



Figure. 4 切り絵 (グループ1)

2-1. グループ2のフィンガーペインティング：Dの事例

Figure. 5はグループ2のフィンガーペインティングである。このグループのフィンガーペインティングは大きく6つの領域に分かれており、一人一人がおおよそ自分の領域を確保しながら作業を進めていた。

D(“イメージと表現の不連続群”)は何を描くか迷っている様子で手をつけるのが遅く、まず木を描き、終盤に後述のEとの境界辺りに同調するような黄色と、パッと開くような動きを表現していった。後の語りで「自然、木とかなら周りに合うだろうと思って」、「人間を描かなかったのは、描きたかったかと言われるとそうとも限らないかもしれないけど、一人だけと描いて浮きたくなかった。周りが描いたものによって描いたものは変わったと思う」と述べ、メンバーとの調和が表現に影響していることが窺われた。

2-2. グループ2の切り絵：E・F・Gの事例

Figure. 6は同じくグループ2の切り絵である。Figure. 5のフィンガーペインティング左中央を描いた受講生は欠席であった。

切り絵で最初に人を貼ったE(“表現全般不得意群”)は、手先が器用で、作品のタイトルをイラスト風に描く役割も毎回引き受けており、フィンガーペインティングも切り絵もパツパツと進めていた。Eのテーマを訊くと、「ポップでかわいいもの」であった。Eの属する“表現全般不得意群”の対象者は人間を表現しない特徴が見られたが、Eはそれとは異なる特徴を示した。



D 周りに合うよ
うなものに描く

Figure. 5 フィンガーペインティング (グループ2)



G 誰か人を貼るまで悩んだ

E ポップが
テーマ

F エリカ様

Figure. 6 切り絵 (グループ2)

同じく切り絵で人間を貼り、Eとは質的に対照的な発言をしたのがF（“イメージ表現探求群”）である。FはFigure. 6下部中央の人間を貼ったことについて、後の語りで、「すごく考えてしまって…人間の感情を表現した。エリカ様は色々スキャンダルもあるけど弱い部分もあるし、一人の人間だし、それを表現したかった」と述べ、人間に込めた意味合いがより明確である点に特徴があった。

G（“イメージと表現の不連続群”）は、フィンガーペインティングでは「空が好きで、自由だから（描いた）。（隣で）太陽を描いてたからちょっとバクッた」と、他者の表現を取り込みながら思うように表現した様子である。切り絵では「周りをすごく気に入った。好きなものを貼ったんだけど色を気に入った」「Eさんが人を貼ってくれなかったら、誰かが貼ってくれるまで貼れずにいた。すんごく悩んだ」と述べた。人を貼ることに相当エネルギーを使ったようである。D同様、グループの調和を大切にしていたと思われる。

3. 事例の考察

質問紙(Galex)を用いた対象者の操作的分類に基づいて、上述したフィンガーペインティングと切り絵に見られる表現生成過程の特徴を4群に分けて、以下に検討する。操作的分類が先行するトップダウン型であるため、事例を分析する際に個人の特徴が捨象される可能性は否定できないが、表現生成過程を把握するための一つの地図を提示できると考えた。

“表現全般得意群”の対象者は、周りに合うよう調整する働きかけをする特徴が見られた。後述する“イメージ表現探求群”の対象者が作品に込めた意味を言語化する傾向があったのに対し、この群では作品そのものに語らせる印象で、ディスカッションではグループ全体の様子をみて発言していた。さらに、作品上で対人交流する点が特徴的で、Aは切り絵でバラバラの紙を花へ変化させたり赤地をリングに変えたりと新たな形を生み出していた。Bの描いた雨にじょうろを描き加えることで雨に新たな意味づけをするなど、ストーリー性を変化させる特徴も見られた。作品上で対人交流をすることで有機的なやりとりが生まれ、グループ全体に安定感をもたらす役割を担っている印象を受けた。

“イメージ表現探求群”の対象者は、人間感情をどのように表現するかというテーマに意識的に取り組んでおり、例えばFが切り絵の際、エリカ様に込めた象徴的意味を語ったように、作品に込めた思いについて頻繁に言語化する特徴が見られた。事例で扱えなかったが、別のグループのある対象者は、フィンガーペインティングでは手のひら全体や指先を使いながら線や手形を描き、時々自分の描いた物を見て何か感じている様子で、切り絵では細かく刻んだ破片を重ね合わせる作業に没頭しており、一貫したテーマは「自分自身」と振り返り用紙に記述していた。“イメージ表現探求群”は、質問紙の上では、体感・感情を表現することが難しいと感じている群である。しかし実際に表現活動を試みると、内面への問題意識が非常に高かった。アレキシサイミア質問紙(Galex)の「体感・感情表現不全因子」は、身体感覚や感情という言葉になりにくいものを表現する難しさについて主体的に問題意識を持っている群を抽出している可能性も考えられた。

“表現全般不得意群”の対象者は、作りたいものがなかなか決まらず、周りを見て模倣したり、作品に付け足す形で表現したりする傾向が見られた。また、Bは他者の勢いに同調して手形を押すが、「侵入してきたから好き放題できた」と、場の勢いに乗れたことが重要視されており、感情までは表現されていない。人間を貼ったEの場合、貼られた人間の

質をみると「ポップでかわいいもの」であり、人間感情というよりはデザイン的要素が主である。このように、自然界に存在する具体物を制作する傾向が見られ、人間感情は表現されにくい傾向が見られた。

“イメージと表現の不連続群”の対象者は、制作の場を通してメンバーといかにつながるかにエネルギーを注いでいた。また、同調すること、されることを暗に期待しつつ、自分のペースを守る、場依存的な姿勢も特徴であった。制作中、対象者の感情はよく動き、それらは後の語りにおいて言語化された。D・Gは、フィンガーペインティングで人間を描かなかった（あるいは切り絵でなかなか人間を貼れなかった）のは、「周りとの調和を壊したくないから」と語り、作品という象徴次元よりも場依存的な人間感情に基づいていたように思われる。Cは、勢いよく手形をつけ空白にドットを加える試みを、「侵入しちゃえ！って」と後に語るが、完成作品をみると制作時ほどのインパクトは感じられず、ドットは作品に調和しているように感じられ、周囲の停滞した空気を読み取っての動きであるようにも思われた。実習中の対象者は明るくよく話しており「楽しかったね」と頷きあう場面が多く、ディスカッション中、執筆者が〈どう感じたか〉何度か問うことで内省を促す場面が多かった。かといって不真面目なのではない。場に左右されて表現が二転三転する不確実性を孕んでいると考えられた。

V. 総合考察および今後の課題

本研究では、フィンガーペインティングと切り絵において、他者とともにありながら内的世界を表現する体験過程について、アレキシサイミア傾向を測定する質問紙を分類基準として4群に分類された事例の比較検討という形で論じた。また、表現を「実感された形になりにくいものを形にする試み（大谷・安立・河野，2006）」と広義に捉え、作品の制作過程に加え、グループ力動の観察、制作後のグループディスカッション、振り返り用紙での報告を総合的に分析することで、表現生成過程についての描写を試みた。

内面と表現のつながりという観点からみると、“イメージ表現探求群”は内面を表現することが自覚的に試みられており、“表現全般得意群”も、イメージを使って自由に対人交流しており、内面と表現とのつながりが感じられた。いずれも質問紙上では空想と内省が得意な群である。“イメージ表現探求群”と“表現全般得意群”の2つの群は、イメージを用いて「自分なりの物語を作」る（小川・河合，2011）、あるいは作ろうとすることのできる対象者ではないか、と推察された。

一方、“表現全般不得意群”は、イメージのまとまりが不明瞭で、一見するとテーマ性のある表現がなされるものの既存のテーマの借り物で表現がなされている場合もあった。また“イメージと表現の不連続群”は、調和的な表現、グループ内の緊張した力動を調和へ変化させる表現が重視され、笑いや発話という形の表現が多く、内面と表現されたものとのつながりは、執筆者が何度か介入していく中で垣間見られた。“表現全般不得意群”と“イメージと表現の不連続群”は、いずれも質問紙上では空想と内省が苦手な群である。この中には、イメージが不明瞭な対象者、借り物のイメージで語れてしまっているかのような対象者、場依存的で表現が二転三転する儂さを抱える対象者が混在していると考えられた。さらに、語りにおいて「何を貼りたいかわからない」などと言語化する対象者がい

る一方、言語化も曖昧な対象者も存在することが示唆された。このことから、ディスカッションの質や、介入による語りの変化も含めて表現生成過程を検討することで、対象者に対する理解が進む可能性も示唆された。

本研究で基準とした分類は対象者の自己報告に基づいており、分類ありきの質的分析に限界があることは否めないが、4つの分類に沿って事例を理解することで、フィンガーペインティングと切り絵における表現生成過程を理解する上での一つの地図を示し得たと思われる。また、群毎の特徴に対する理解を枠組みとして、個別的な理解へと進めてみることで、心理専門家として対象者らの表現に同行する上での指針やヒントのようなものも見出せるのではないか。本研究においては、高石（2001）が「イメージが沸かない」と推測し、大山（2007）が自分に向き合うことが難しいと述べたような、フィンガーペインティングや切り絵で表現したいものが曖昧な対象者が実際に見られた。こうした対象者への関わりと理解については、今後の課題としたい。

また、研究計画には組み込まなかったものの、質問紙を実施した翌週にクラスの平均点と各自の得点をフィードバックし、質問紙の主旨を授業の目的と関連づけて説明している。フィードバックの試みは、自己理解を促進する効果も期待される。さらには、実習の事前事後で、自己理解に関する指標を測定する研究にも発展可能であろう。

本研究でとりあげた特徴は、偶発的に編成された授業内のグループ固有の特徴である可能性も否定しきれない。各群の特徴として記述された内容は群を代表する特徴であるのか、あるいは、サンプルの少なさゆえに対象者固有の特徴である可能性が高いのか、本研究では十分に検討しきれなかった。今後、サンプルを増やし、本稿で得た知見の信頼性を検討していくことが必要であろう。また、グループの変容や成長という視点（治田・岸・中根・名尾、2003）は含まれておらず、同一グループへの継続的な関わりにおける検討も明らかにする必要があるだろう。さらに、今回の対象者は20代であった。また、様々な年代を対象とすることにより、年齢の要因によらず般化できる知見か否かの検討も必要であろう。

本研究は、イメージの沸きにくさ、自分と向き合うことの難しさ、という視点を切り口として、表現生成過程を捉えようとする試みであった。本稿の冒頭に述べた、非言語的手法によって内的世界の表現し、表現すること自体が治療的意味を持つ芸術療法のあり方を再考し、表現とは何かについて考え直すものであるが、端緒についたばかりであり、データの積み上げが必要である。多様な形で今後の発展的研究が期待される。

付記

本論文の掲載を快諾してくれた受講生の皆さまにお礼申し上げます。本稿は日本箱庭療法学会第24回大会にて発表した内容を加筆修正したものである。発表に対する貴重なご意見をくださった岸良範先生、伊東和子先生に感謝いたします。論文をまとめるにあたりご指導を賜りました大山康宏先生に感謝いたします。本研究は科学研究費補助金（若手研究B課題番号20730458）の補助を受けた。

文 献

- 安立奈歩（2010）：青年期の境界例心性に関する再検討—解離の視点を導入して—。椋山女学園
大学研究論集（人文科学篇），42，95-105.
- 後藤和史・小玉正博・佐々木雄二（1999）：アレキシサイミアは一次元特性なのか？—2因子モ
デルアレキシサイミア質問紙の作成。筑波大学心理学研究，21，163-172.
- 治田哲之・岸良範・中根淑子・名尾典子（2003）：ファンタジーグループにおける体験の内容と
リピーターに表れる変化の縦断的研究。箱庭療法学研究，16(1)，21-36.
- 樋口和彦・岡田康伸（2000）：ファンタジーグループ入門。創元社.
- 樋口和彦・岡田康伸（2007）：イメージによるグループワークの実際。ファンタジーグループの
体験から。現代のエスプリ別冊。至文堂.
- 小川洋子・河合隼雄（2011）：生きるとは，自分の物語をつくること。新潮文庫.
- 大谷真弓・安立奈歩・河野伸子（2004）：箱庭を用いた表現の生成過程に関する研究～対自的表
現と対他的表現を通じて～。日本箱庭療法学会第18回大会発表論文集，37-38.
- 大山泰宏（2007）：グループワークにおける差異と器。岡田康伸・河合俊雄・桑原知子編。京大
心理臨床シリーズ5。心理臨床における個と集団。創元社。164-173.
- 高石恭子（2001）：現代青年の特徴的心性と芸術療法。日本芸術療法学会誌，32(1)，71-72.